国語科学習指導案

日　時　令和７年 11 月 11 日（火）
第５校時　13：15～14：05
学校名
対　象　第２学年　　組　　名
会　場　２　階　２　年　教　室
授業者

１　単元名　４人の人物の考え方を読み取り、昔と今の命について考えたことをまとめよう。
教材名　「扇の的―『平家物語』から」「敦盛の最期―『平家物語』から」（光村図書　国語２）

２　単元の目標

・　現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知ることができる。　〔知識及び技能〕⑶イ
・　文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。　〔思考力、判断力、表現力等〕C⑴オ
・　言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとすることができる。　「学びに向かう力、人間性等」

３　本単元における言語活動

「扇の的」、「弓流し」、「敦盛の最期」を読み、登場人物と自分の命に対する考え方を比較し、まとめる活動。　（関連：〔思考力、判断力、表現力等〕A⑵ア）

４　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①　現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を理解している。（⑶イ）	①　「読むこと」において、文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりしている。（C⑴オ）	①　作品から読み取ったことを基に、当時の人と現代のものの見方や考え方について粘り強く考え、自分の意見を見直し、学習を調整して、考えをまとめようとしている。

５　指導観

⑴　単元観

本単元は、〔知識及び技能〕について、中学校学習指導要領（平成 29 年３月告示）第２章　第１節　国語〔第２学年〕２　内容〔知識及び技能〕⑶

> イ　現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知ること。

を受けて設定した。

第１時での作品の概要、係り結びの復習を踏まえて、第２時の「扇の的」、第３時の「弓流し」で係り結びの知識の定着を確認する。本文中でどのように使われ、内容にどのような効果を与えているのかを確認できるように指導する。第４時の「敦盛の最期」の読解では、第３時までの学習を踏まえて、現代語訳と原文を照応しながら読み進め、係り結びが使われている部分は、登場人物の心情が大きく揺れ動くところであることに気付けるようにする。その上で直実の置かれた武士の社会ゆえの葛藤と、そこでの心情の揺らぎを読み取れるよう指導する。

また、本単元は、中学校学習指導要領（平成 29 年３月告示）　第２章　第１節　国語〔第１学年〕２　内容〔思考力、判断力、表現力等〕

Ｃ　読むこと⑴

オ　文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること。

を受けて設定した。

Ｃ　読むこと⑴に関して、中学校学習指導要領（平成 29 年３月告示）解説　国語編（P.100）には、次のように述べられている。

「文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付ける際には、関連する知識や経験を想起して列挙するのみでなく、それらと結び付けることによって、理解したことや考えたことを一層具体的で明確なものにしていくことが重要である。読み手がもつ知識や経験は一人一人異なることから、どのような知識や経験と結び付けるかによって、同じ文章を読んでも考えは多様なものとなることが考えられる。その上で、他者の考えやその根拠、考えの道筋などを知り、共感したり疑問をもったり自分の考えと対比したりすることが、物事に対する新たな視点をもつことにつながり、自分の考えを広げたり深めたりすることになる。」

本単元では、「平家物語」から４人の人物の命についての考え方を読み取り、自分の考えと比較する活動をする。第２時の「扇の的」と第３時の「弓流し」では、武家社会にみられる武士道精神に基づいた、命よりも誇りや名誉を優先する考え方や、冷酷に相手の命を奪うという考え方を読み取り、現代との考え方の違いを明確にする。第４時の「敦盛の最期」では、命の奪い合いが当然の状況の中にあっても、子を思い、相手を思う心をもっている人がいることへの気付きを促す。一方で、相手を大切に思うからこそ自分の手で命を奪い弔うという現代では矛盾していると感じてしまうような考え方にも気付けるようにし、現代との共通点と相違点について考えるきっかけにする。現代にも、人命救助や使命のために命を懸ける職業がある。第５時に今と昔の命についての考え方についてまとめる活動の際に、第４時までで読み取った現代との相違点が本当に古典世界に特有のものであるかについて考える場面を設け、古典に表れたものの見方や考え方について現代のものの見方や考え方と比べながら自分の考えを広げたり深めたりしていけるよう指導する。

考えるテーマが「命」というセンシティブなものであるため、特に「敦盛の最期」の場面の直実の行動について考える際には、考える内容が安楽死の是非や在り方などに逸脱しないように留意する。

武家社会における命についての見方や考え方をより多くの視点から見るために、教科書本文に掲載されている「扇の的」「弓流し」に加えて、巻末資料として掲載されている「敦盛の最期」を合わせ読みする。「敦盛の最期」は教科書本文に掲載される分量であるため、教科書に掲載されている現代語訳の一部をより簡単に意訳したプリントを生徒に配布し、学習活動に十分な時間をとれるようにする。

⑵　生徒観

第２学年生徒は、１学期の「枕草子」を扱った単元で、「枕草子」や「小倉百人一首」に表れた作者と自分のものの見方や考え方とを比較して、古典の世界と現代との共通点や相違点を考える学習を行った。単元の初めには相違点が多いと考えていた生徒も、単元の終わりには作品に表れている作者のものの見方や考え方を抽象化することで、現代にも通ずるものがあることに気付けていた。

自分でオリジナルの枕草子を作る活動を行ったことも、生徒が古典作品と現代との共通点を見付け、古典世界を理解したり、味わったりするための手立てとして一定の成果があったと考える。一方で、オリジナル枕草子は、自分の考えを中心に作成したため、古典の世界とのつながりや理解を十分にできているかという点で疑問が残った。「平家物語」は武家社会の考え方が根底にあるため、自身の考えを中心にすることが難しいと考える。古典世界の特徴を理解し味わいつつも、現代との共通点を見出したり、自分の生活に関連付けたりできるような手立てをとり、単元の目標に迫っていく。

⑶　教材観

本教材は、鎌倉時代に成立した軍記物語である。源平の合戦を背景としており、栄枯盛衰や無常観といった考え方が見られる。教科書に掲載されている「扇の的」は海に逃げる平氏一門を源氏方が追い、討つ場面である。那須与一が主の命を受け、源氏の誇りと自分の命を懸けて船上の的を射抜こうとする際の与一の心情が描写されている。「弓流し」は、危険を顧みず弓を拾った源義経の行動に疑問を抱いた家臣に、義経が理由を話す場面である。落とした弓が立派なものであれば、自分の名誉も守れるが、実際はそうではなく、格落ちの弓であった。そうであるから命を懸けて弓を拾って名誉を守ったのだと説明した義経の言葉に家臣たちは胸を打たれる様子が描写される。「敦盛の最期」は、平家方の生き残りの敦盛を源氏の熊谷次郎直実が追い詰め討つ場面である。直実は追い詰めた敦盛が自身の子と同じ年の頃であることを知り、命を奪うことに葛藤を抱きつつも、自分の手で首を取り弔う決心をし、決行する場面である。いずれの話も命に関して現代では経験しにくい内容を扱っている。しかし現代にも通ずる部分として、「子どもを想う親の気持ち」や「大切なものや使命のために命を懸ける思い」を読み取ることができる。現代との相違点が目立つ作品ではあるが、抽象化することで現代にも通ずる考え方が読み取れる作品である。

また、『平家物語』は、琵琶法師によって語り継がれる中で、その語り口が洗練され、独特のリズムと抑揚をもつようになった。「扇の的」「敦盛の最期」には七五調や擬音語が使われている点から語感の良さを味わえる作品である。作品を読む際には、場面の様子や人物の心情を想像しながら読むよう指導し、古文特有のリズムを味わえるようにする。

６　年間指導計画における位置付け　（第２学年　読むこと「文学的な文章」）

時期	単元名・「教材名」	重点指導事項
４月	描写から人物同士の関係を読み取り、人物相関図にまとめよう。 「アイスプラネット」	ア　文章全体と部分との関係に注意しながら、主張と例示との関係や登場人物の設定の仕方などを捉えること。
５月	作品を読み、自分と昔の人のものの見方や考え方とを比べて考えたことを文章にまとめよう 「枕草子」	オ　文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること。

６月	作品ごとの表現の特徴を比べ、作品のよさを考えまとめよう 「短歌に親しむ」「短歌を味わう」	エ　観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えること。
９月	過去と現在、伏線と結末の関係を読み解き、登場人物の言動の意味を考えよう。 「ヒューマノイド」	イ　目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり、登場人物の言動の意味などについて考えたりして、内容を解釈すること。
９月	文章の構成や、人物の出来事を語るときの表現から、筆者の思いを考えよう。 「字のない葉書」	エ　観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えること。
10 月	４人の人物の考え方を読み取り、昔と今の命について考えたことをまとめよう。「扇の的―『平家物語』から」「敦盛の最期―『平家物語』から」【本単元】	オ　文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること。
11 月	作品を読み、内容や表現について考えたことについてまとめよう。 「仁和寺にある法師―『徒然草』から」 「漢詩の風景」	オ　文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること。
１月	人物像や表現の効果など、自分の選んだ観点で作品の魅力を捉えよう。 「走れメロス」	ア　文章全体と部分との関係に注意しながら、主張と例示との関係や登場人物の設定の仕方などを捉えること。

７　単元の指導計画と評価計画（全５時間）

過程	時間	学習目標	学習活動	評価規準 （評価方法）
構造と内容の把握	第１時	作品の特徴を理解することができる。	１　単元の目標を理解する。 文章を読んで考えたことに基づいて、自分の考えを広げよう。 ２　本時の目標を理解する。 作品の特徴を理解しよう。 ３　単元の学習活動を理解する。 ４　作品の概要を確認する。 ５　冒頭「祇園精舎の～」を朗読する。 ６　「扇の的」を範読する。 ７　武士が命をどのように扱っていたと思うかについて考えをまとめる。 ８　本時の学習を振り返る。	
精査・解釈	第２時	「扇の的」を読み、武士が命についてどのように考えているかまとめることができる。	１　前時の学習を振り返る。 ２　本時の目標を理解する。 「扇の的」を読み、武士が命についてどのように考えているかまとめよう。 ３　作品を通読する。 ４　内容を整理する。 ５　人物の心情について考える。 ６　本時の学習を振り返る。	

	第3時	「弓流し」を読み、義経の行動について自分の考えをまとめることができる。	1　前時の学習を振り返る。 2　本時の目標を理解する。 「弓流し」を読み、義経の行動について自分の考えをまとめよう。 3　作品を通読する。 4　内容を整理する。 5　義経の行動について自分の考えをまとめる。 6　意見を共有する。 7　本時の学習を振り返る。	
	第4時	「敦盛の最期」を読み、それぞれの人物の命の考え方についてまとめることができる。	1　前時の学習を振り返る。 2　本時の目標を理解する。 「敦盛の最期」を読み、それぞれの人物の命の考え方についてまとめよう。 3　作品を通読する。 4　係り結びを手掛かりに、直実の気持ちが大きく動くところを探す。 5　人物の心情について考える。 6　本時の学習を振り返る。	アー① 登場人物の命に対する考え方について、係り結びに着目して読み取っている。（ワークシートの分析）
考えの形成、共有	第5時（本時）	作品から読み取った命についての考え方と自分の考え方とを比較してまとめることができる。	1　前時の学習を振り返る。 2　本時の目標を理解する。 作品から読み取った命についての考え方と自分の考え方とを比較してまとめよう。 3　それぞれの作品で読み取った命についての考え方を振り返る。 4　大切なものに命を懸けている現代の例を考える。 5　現代と昔の命の考え方について考えたことをまとめる。 6　班で意見を共有する。 7　共有した意見を基にもう一度考えをまとめる。 8　単元の学習の振り返りと自己評価をする。	アー① 作品から読み取ったことを基に、当時の人や社会について考えたことをまとめている。 （観察、ワークシートの分析） イー① 作品から読み取った命についての考え方と自分の考え方とを比較してまとめている。 （観察、ワークシートの分析） ウー① 作品から読み取ったことを基に、当時の人と現代の私たちのものの見方や考え方について粘り強く考え、自分の意見を見直し、学習を調整して、考えをまとめようとしている。 （観察、ワークシートの分析、振り返りシートの分析）

8　指導に当たって

班テーマ 「評価で思考の質を高め、生徒の深い学びにつなげる授業展開の工夫」

⑴　「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

中学校段階の古典教育において目指すところは、古典文化が現代につながりのあるものであることを知り、自分の今後に生かせるようになることであると考える。その際、生徒の身近な事象や体験などを基にすることで、古典を親しみやすいものとして捉えられるように配慮することが求められる。

本単元では、言語活動を「『扇の的』、『弓流し』、『敦盛の最期』を読み、登場人物と自分の命に対する考え方を比較し、まとめる活動」と設定した。１学期の「枕草子」を扱った単元で、当時の人々と自分のものの見方や考え方とを比較する学習活動をした際は、生徒自身の経験や体験を基に考えることができたため、比較的容易に課題に向き合うことができていた。一方、今回の単元で扱う「平家物語」は、武家社会特有の武士道精神や、無常観などの考え方を背景にした作品であるため、生徒が実感をもって読み味わうことが難しい作品である。そこで、生徒が学習課題に向き合いやすくなるように、三つの場面を順番に扱う。第２時に「扇の的」、第３時に「弓流し」を読み、武士たちと武士を取り巻く環境について確認したあとに、第４時の「敦盛の最期」で、武士の中にも様々な思いを抱えた人がいることを読み取る。当時の社会や武士の考え方を理解した上で、生徒が自分の考えと比較できるようにした。社会の状況や在り方が変わってもそこに生きている人たちの思いには共通するものがあることに生徒が自分で気付けるようにする。

⑵　生徒が自ら学習課題を解決できる授業展開の工夫

当時の人々の考え方を読み取るにあたり、教科書教材（「扇の的―『平家物語』から」）だけでなく、付録資料の「敦盛の最期―『平家物語』から」を併せて扱うことで、より多角的な視点から古典世界の人々について考え、学習に取り組めるようにした。

単元の学習にあたり、現代語訳で物語の内容を理解するだけでなく、古典作品を読み深める一つの方法として、係り結びの働きに着目するようにした。第４時の「敦盛の最期」の読解の際に、係り結びに着目し、人の思いの強さが表れている場所を探して考える場面を設定する。古典文法の知識と内容読解が乖離しやすいと考えたため、学習した古典の知識を活用しながら自ら学習課題を解決できるようにした。

⑶　生徒の学びの質を高めるための評価の工夫

本単元は古典教材を扱うため、知識の定着を確かなものにすることで、生徒の学びの質を高めていくことができると考えた。第３時に直実の様子に見られる命についての考え方を読み取る際、現代語訳だけで内容を捉えて終わってしまわないように、古文の文法知識（係り結び）を定着、活用できるように指導していく。そこで、第１時に係り結びについて復習し、第２時の「扇の的」で本文中に使われている係り結びを探すことができるかを見取り、必要に応じて復習する。第４時の「敦盛の最期」で、係り結びを探し、その働きを使って登場人物の心が大きく動く部分を読み取れるかを見取る。第２時で係り結びを探すことができたかを生徒にも自己評価させ、係り結びの理解に関して「努力を要する」状況（C）に該当する生徒を把握し、教師の評価とすり合わせた上で第３時の「弓流し」の読解の際に「努力を要する」状況（C）に該当する生徒を中心に支援し、第４時の「敦盛の最期」で知識を活用する際には「おおむね満足できる」状況（B）に到達できるようする。

「努力を要する」状況（C）に該当する生徒に対しては、教師の支援に加えて、生徒たちで互いの学習を助け合える雰囲気を醸成していくために、本文読解の際にペアで確認する時間を設ける。

９　本時（全５時間中の第５時）

⑴　本時の目標

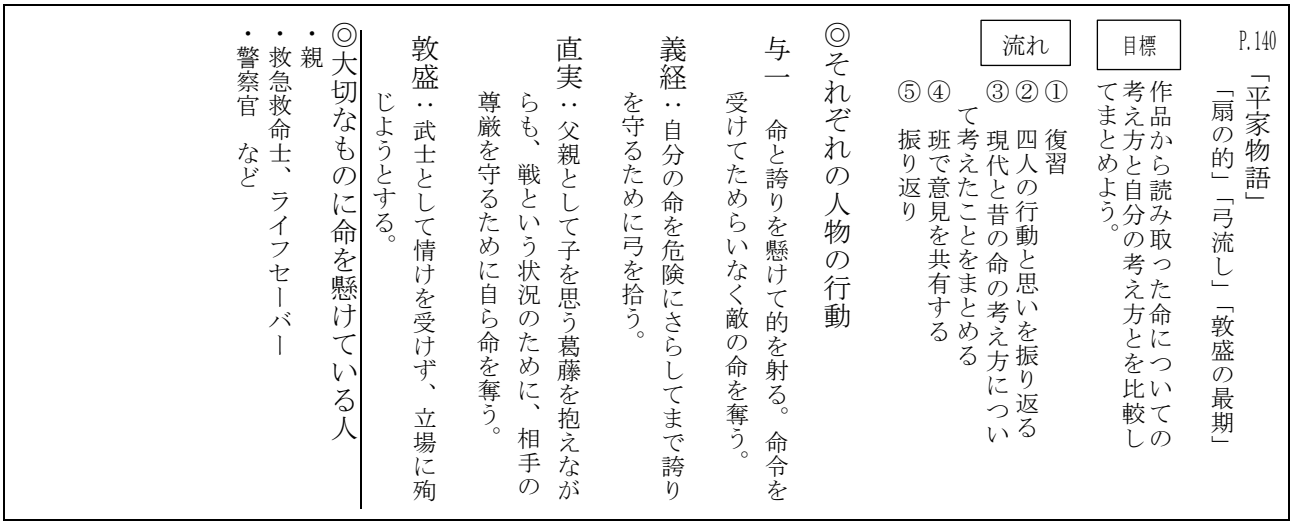
作品から読み取った命についての考え方と自分の考え方とを比較してまとめることができる。

⑵　本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準（評価方法）
導入5分	１　前時の学習を振り返る。 ２　本時の目標を理解する。 作品から読み取った命についての考え方と自分の考え方とを比較してまとめよう。		
展開35分	３　それぞれの作品で読み取った命についての考え方を振り返る。 それぞれの人物の行動 与一：命と誇りを懸けて的を射る。命令を受けてためらいなく敵の命を奪う。 義経：自分の命を危険にさらしてまで誇りを守るために弓を拾う。 直実：父親として子を思う葛藤を抱えながらも、戦という状況のために、相手の尊厳を守るために自ら命を奪う。 敦盛：武士として情けを受けず、立場に殉じようとする。 ４　大切なものに命を懸けている現代の例を考える。 例　親、教師、救急救命士、ライフセーバー、警察官など ５　現代と昔の命の考え方について考えたことをまとめる。 ６　班で意見を共有する。 ７　共有した意見を基にもう一度考えをまとめる。	・　与一が敵を射る行為に対しての反応の違いが武士たちの命についての考え方の違いによるものなのかを振り返るように指示する。 ・　義経の覚悟や心意気に対して、周囲の人が感動していることから、義経個人の思想に留まらず、その時代の一般通念である点を振り返るように指示する。 ・　第１時に書いた武士についての考えと比較して考えをまとめる際には、第１時と変わったのか、変わらなかったのかとその理由を書くように指示する。	ア－① 作品から読み取ったことを基に、当時の人や社会について考えたことをまとめている。 （観察、ワークシートの分析） イ－① 作品から読み取った命についての考え方と自分の考え方とを比較してまとめている。 （観察、ワークシートの分析） ウ－① 作品から読み取ったことを基に、当時の人と現代の私たちのものの見方や考え方について粘り強く考え、自分の意見を見直し、学習を調整して、考えをまとめようとしている。 （観察、ワークシートの分析、振り返りシートの分析）

まとめ10分	8　単元の学習の振り返りと自己評価をする。		

⑶　板書計画



⑷　授業観察の視点

ア　生徒が自ら学習課題を解決できるような授業展開の工夫がなされていたか。

イ　本時の流れは、古文に対する興味や理解を高めるために効果的だったか。

東京教師道場（２年次）　　国語　中学校　　第２班

研修の概要

１　東京教師道場について

４名の部員と１名のリーダーと担当教授からなる班で、主に授業観察と協議からなる授業研究を行う２年間の研修である。

<table>
<tr><td rowspan="2">１年次</td><td colspan="3">第１期　把握・点検期</td><td colspan="2"></td><td>第２期　発展・充実期</td></tr>
<tr><td>第１回
授業研究</td><td>第２回
授業研究</td><td>第３・４回授業研究</td><td>夏季集中協議
（班）</td><td>夏季集中協議
（組）</td><td>第５～10 回
授業研究</td></tr>
<tr><td></td><td>教職員研修センター</td><td>リーダーの所属校</td><td colspan="4">部員及びリーダーの所属校等</td></tr>
<tr><td rowspan="2">２年次</td><td colspan="2">第２期　発展・充実期</td><td colspan="4">第３期　自立・完成期</td></tr>
<tr><td>第 11 回
授業研究</td><td>第 12～14 回
授業研究</td><td>夏季集中協議
（班）</td><td>夏季集中協議
（組）</td><td>第 15～19 回
授業研究</td><td>第 20 回
授業研究</td></tr>
<tr><td></td><td>教職員研修センター</td><td colspan="4">部員及びリーダーの所属校等</td><td>教職員研修センター</td></tr>
</table>

・　２年間で３回、学校種を越えた授業研究を実施した。

・　夏季休業期間には、夏季集中協議として、模擬授業や授業力の自己診断に基づく協議、教材や実践事例の紹介等を行った。

２　班での取組及び班テーマについて

<table>
<tr><td>第１期

把握・点検期</td><td>主体的・対話的で深い学びの実現～指導と評価の一体化～
指導と評価の一体化を目指し、単元を貫いた「縦の指導と評価の一体化」、各時間の目標、学習活動、評価規準の一貫性がある「横の指導と評価の一体化」を目指した整合性のとれた学習指導案の作成を目指してきた。また、生徒の提出物を適切に評価するために、「おおむね満足できる状況（Ｂ)」の姿を明確に設定し、「努力を要する状況（Ｃ)」にある生徒への支援方法についても具体的に検討できるようにした。さらに、「十分満足できる状況（Ａ)」については、中学校学習指導要領解説国語編（平成 29 年７月）の記載内容を根拠として判断できるようにした。
授業力の６要素の中で自分の得意とする分野、苦手とする分野をそれぞれ把握し、課題を明確にすることができた。互いの授業を見学することで自分の授業改善にも役立てることができた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第２期

発展・充実期</td><td>「生徒が自ら学習課題を解決できる授業展開の工夫」</td></tr>
<tr><td>(設定理由)
班員全員が授業力の６要素の中で課題としているのが「指導技術（授業展開)」であったため、この班テーマを設定した。
生徒の学習意欲を高め、生徒が主体的に学習に取り組むためにどのような言語活動、授業展開が有効であるかを具体的に考える必要があったため設定した。部員それぞれが「実生活に根差した魅力的な言語活動」や「生徒が能動的に行える思考ツールの実施」「複線型授業」を導入するなどした。
生徒が自ら「知りたい・学びたい」という意欲をもち、学習課題を解決できるような手立てを用意しておくことが生徒の主体的に学ぶ姿にもつながると考えた。</td></tr>
</table>

第３期 自 立・ 完成期	「評価で思考の質を高め、生徒の深い学びにつなげる授業展開の工夫」 （設定理由） 第２期の授業から、生徒がより深く学べるためにはどうすればよいかを考えた。 診断的な評価・形成的な評価・総括的な評価の３つの評価を適切に行うことで、生徒の深い学びにつながると考えた。特に形成的な評価は習熟度や学力差のある生徒へのアプローチとして有効である。そのため、個別最適な支援ができるよう、単元の各時間における形成的な評価を効果的に行う必要があるとして設定した。

３　成果と課題

【成果】

・　生徒の活動が明確かつシンプルな学習過程の設定

身に付けさせたい力を明確にゴールとして設定し、そこから逆算して各時間の学習課題を組み立てることができた。指導案の検討段階では、不要な学習活動を削ぎ落としてシンプルな流れにするために意見を出し合い、精選を図った。さらに、実際の授業では、指導者の指示や声掛けを必要最低限にとどめつつ効果的に行うことで、生徒の学習過程をより明確にし、集中して学びに取り組めるよう工夫することができた。

・　「知識及び技能」と「思考力・判断力・表現力等」の関連付け、及び往還の意識

「知識及び技能」と「思考力・判断力・表現力等」の指導項目に対して、常に相互作用を意識しながら授業を構想した。その際には、知識や技能の習得を単なる暗記や技術の定着にとどめるのではなく、それを軸として思考の深まり、判断の的確さ、自らの考えを他者に伝える表現力へと発展させられるように工夫した。両者の各重点指導事項を関連付け、補完し合いながら学習が進むような課題を設けた。これにより「知識及び技能」の定着とともに「思考力・判断力・表現力」がスパイラル的に向上する授業の思案、実践ができた。

【課題】

・　深い学びへのアプローチ

魅力的な言語活動の設定や思考ツールの活用、複線型授業などの授業展開の工夫に取り組み、生徒の主体的・対話的な学びは実現できた。しかし一方で、そうした活動を深い学びへとつなげる流れを十分に構築できていないという課題が残った。これまでの授業研究の実践では、生徒主体の活動を掲げながらも、実際には指導者主導の流れが強くなり、生徒自身が自発的に課題を発見し解決策を構想する段階に十分到達できなかった。

・　振り返りの必然性と時間の十分な確保

生徒が自ら学習課題を解決できるよう工夫した授業展開は一定の成果を上げたものの、その分時間が膨らみ、振り返りの時間を十分に確保できなかった。本来振り返りは生徒が自らの学習をメタ認知し、その単元で身に付けるべき力が習得できたかを確認する重要な場面である。また、単元の系統性を踏まえ、獲得した力を次の学習へとつなげていくためにも不可欠である。したがって、指導者と生徒が振り返りの必然性を共有し、十分な時間を保障することが今後の課題となる。